# 序

今，ソウルではオリンピックの真っ最中であるが，同じスポーツの祭典といっても，プロボクシングの世界ヘビー級タイトルマッチとかプロ野球のワールドシリーズなどと趣きを異にする興奮がある。これは一方ではメダル数を競う素朴なナショナリズムもあろうが，他方では記録更新に期待がかかるからである。もっともプロのスポーツでも，何連勝とか賞金王，得点王といった力量の安定性にかかわる記録はよく見聞する。しかし，速さや高さなどを競うスポーツの最高記録はアマチュアによるオリンピックなどで出る場合が多い。

これらのスポーツがプロにはないと言うことかもしれないが，こうした事実はプロとアマの本質的差によるものであると言ってよい。一般にプロの方がアマより実力が上と考えるのが普通であり，時にスポーツの種類により，オリンピックがプロへの登龍門となることもあるが必ずしも連続性はない。むしろオリンピックがアマチュアリズムに拘るのは，スポーツに限らずアマとプロには異なる役割があるということであろう。

元来，amateurism は道楽，好事，素人芸といった意味合いで，余り深刻な響きはない。しかし音楽好きの友人から聞いた話では優雅の証しとしてアマチュアだからこそ，プロにはできない演奏会を開くことができるのだそうである。つまり技は確かだが定期演奏会に間に合わせるためには十分な練習時間のとれないプロは余りリスキーな演奏はしない。むしろ余暇を使って長い時間，納得のいく迄練習を重ねたアマチュアの方が新しい試みに挑戦できるというのである。プロの演奏にはやはり安心して楽しめる所に期待があり，アマチュアの場合には一抹の不安を感じながら冒険を成功させる所にも期待がかかるのである。実業社会でも似たようなことがある。妙にプロ意識を持った伝統ある企業よりも，無名のベンチャー・ビジネスの方が画期的な発明や新しい事業展開で世の中を驚かせるといった類いである。つまり失敗によって失うもののない所に amateurism の真髄がある。

研究が未知の事象を対象とする以上，得られた成果に対する信頼が必要であり，そこに研究者がプロでなければならぬ所以がある。しかし逆説的に言えば，成功するとは限らないのが研究の宿命であるならば，研究者は同時に常にアマチュアでなければならない。そして企業の研究所の役割もまたここにあるように思う。

1988年10月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士　太　田　利　彦